

Voyage en Correze, pays de Colette

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 孝江 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3787

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



コレットゆかりの地コレーズ県への旅

Voyage en Corrèze, pays de Colette

松田孝江

1. はじめに

コレットは1912年39歳のときに、コレーズ県出身の男爵アンリ・ド・ジュヴネルと二度目の結婚をしたが、1925年に離婚することになる。しかしこの結婚生活は、コレットが作家としての地位を不動のものにした時期と重なっている。特に1920年は、『シェリ』がそれまで無視されていた文壇の大御所アンドレ・ジッドに絶賛され、マルセル・ブルーストと同時にレジオン・ドヌール勲章受勲の榮譽に浴した記念すべき年である。ジャーナリストから政治家に転じ、教育大臣やイタリア大使を歴任することになるこの人物との生活は、コレットに苦渋を強いる結果に終わったが、愛娘はもとより二人の義理の息子を含むジュヴネル家の人々は、離婚後もコレットの心に生き続けた。コレーズ県はコレットにとって生まれ故郷につぐ思い出の地なのである。その思い出の地に、コレットの足跡を追ってみることにする。

2. ヴアレッツのカステル・ノヴェルとジュヴネル家の人々

コレットがアンリと共に初めてカステル・ノヴェルを訪れたのは1911年8月初めのことで、二人は二週間ほどこの城に滞在した。コレットは前年の12月から日刊紙「ル・マタン」に寄稿していたが、二人の編集長のうちのひとりがアンリだった。1884年創刊の「ル・マタン」は、当時の四大日刊紙のひとつで、100万部に近い発行部数を誇っていた。アンリは、長男ベルトランの母である最初の妻クレール・ボアスとの離婚が1909年に成立する前からイザベル・ド・コマンジュと愛人関係にあり、二人の間には1907年に息子ルノーが誕生していた。そんなわけでコレットとの仲が発覚したときにはひと悶着あったが、アンリはコレットを郷里に連れていくことで、彼女への思いが真剣であることを伝えたかったのかもしれない。

アンリはフランス南西部リムザン地方コレーズ県出身で、ブリーヴから8キロ北西の田園地帯にあるヴァレッツの村はずれの、小高い丘の上にそびえるカステル・ノヴェルの城主だった。北側は険しい断崖であるが、南側は緩斜面となって平地に連なるこの丘の上に見張りの塔が築かれたのは、中世初期の頃で、13世紀の古文書にはすでにカステル・ノヴェルと記されているという。14世紀末に全容が成ったこの城を、アンリの祖父ジャック＝レオン・ド・ジュヴネル（1811－1886）が購入したのは1844年末のことであった。ジュヴネル一族は、ブリーヴから10キロほど東のオーバズィヌの出身で、県知事だったアンリの父ラウル（1844－1910）は、引退後この城で亡くなっていた。初めて城を訪れた時の印象をコレットは後年ルノーに書き送っている。「明るい空を背景にした黒い塔、ろうそくと石油ランプに照らされた建物の一階、磨きをかけられた銀の食器、白っぽい礼服を着た従僕、剪定していないバラの巨木—すべてが薄暗く、時の重みに碎け、胸にしみるよう」（ハーバート・ロットマン著、工藤庸子訳『コレット』pp.196－197）正面を雪のように覆っていた樹齢300年と言われる白バラの大木は、残念ながらその後切り倒されて今では見ることができない。

1912年8月1日、アンリはひとりパリを発ってカステル・ノヴェルに向かった。8月4日と5日の両日、カステル・ノヴェルで航空ショーが開催されることになっていた。アンリが城の南面に広がる牧草地と城の施設を提供することによって実現にこぎつけたのだった。何千人もの航空機ファンのために臨時列車が出るほどのビッグイベントだった。当時新聞や週刊誌への執筆が増えつつあったコレットは、作家であると同時にジャーナリストでもあった。飛行機や気球の旅のルポ、刑事裁判の傍聴など依頼があればなんでも引き受けるコレットだったが、どうしてこの航空ショーに来なかったのか。リムザン出身のアラン・ギャランはその著『コレット』（pp.44－45）で残念がっている。

8月末にコレットは病床の母を見舞うために三日ほど郷里のシャティヨン＝コリニィに滞在したが、9月25日に母は死去した。パリ最大のミュージックホール、パ＝タ＝クラン Ba-Ta-Clan でパントマイム劇『夜の鳥』に出演していたコレットは、母の葬儀に参列することもなく、10月初めに公演を終えると、その足でアンリと共にカステル・ノヴェルに向かった。コレットはアンリの母マリーに迎えられた。マミータと呼ばれていたアンリの

母は当時 53 歳、コレットの異父姉ジュリエットより 3 歳上で、まだ十分に若かった。趣味のテニスに打ちこみ、コニャックやタバコをたしなむ女性だった。17 歳で結婚、19 歳でアンリを出産したマリーは、40 歳近くになって出奔し、アンリには 23 も歳の離れた異父妹エディットがいた。10 月半ばにパリに戻ったコレットは、スケジュールどおり、10 月 25 日から 31 日までジュネーヴのアポロ劇場で『夜の鳥』の舞台に立った。クリスマスが二週間後に迫った 12 月 9 日、二人はパリで結婚式を挙げた。翌 1913 年 7 月 3 日、コレットは 40 歳にして娘コレット・ド・ジュヴネルを出産した。コレット 2 世、またはベル・ガズーという愛称で呼ばれることになる娘を連れて、コレットはその年の 9 月までカステル・ノヴェルで過ごした。

コレットが生まれたばかりの娘とともにカステル・ノヴェルに滞在していた 9 月、ポアンカレ大統領が視察のためにこの地を訪れた。この時の様子について、伝記作家たちの多くは、ジュヴネル夫妻が大統領一行 87 名をカステル・ノヴェルに招いて盛大な歓迎晩餐会を催した、と記している。これについてアラン・ギャランは、以下のように異なる解釈を展開している。週刊新聞「イリュストラシオン」の特派員は、[9 月 12 日の午前、ヴェゼール川を左に見てブリーヴに向かっていた一行に] オブジャとブリーヴの間で、同業者アンリ・ド・ジュヴネル所有の城カステル・ノヴェルの円錐形のブルーの塔が見えた、と記している。この日ブリーヴでは劇場ホールで町主催の歓迎昼食会があった。一行はその晩ブリーヴの市庁舎で一夜を過ごし、翌朝ロット県に向けて発っていった。ギャランによれば、こうした行程は歴史家たちによって詳細に記録されていて、一行がカステル・ノヴェルに立ち寄った形跡はないという。伝記作家たちの記述は、コレットが友人アメルに宛てた手紙を基にしているらしい。87 名の招待客云々は、はたしてコレットの脚色なのだろうか。しかし 1921 年、コレーズ県から上院議員に選出されることになるアンリは、折りあるごとに地元に戻り、その存在をアピールしていたことだけは確かである。

パリに帰ったコレットは、やがて年配のイギリス人ナース Miss Draper を雇い入れて、カステル・ノヴェルでの娘の養育係りとした。コレット 2 世はカステル・ノヴェルで使用人たちに囲まれて成長し、パリで多忙な生活を送っている両親は、暇を見つけては娘に会いに行くというスタイルが出来上がった。

1歳半の娘とともに、コレットがブルターニュの別荘ロズヴァンで夏を過ごしていた1914年8月、ドイツがフランスに戦線布告、1918年まで続く第一次世界大戦の始まりだった。アンリはヴェルダンの前線に赴いた。コレットも従軍記者としてヴェルダンに向かい、その後も同盟国イタリアでの取材と多忙だった。

戦時下の1916年2月、コレーズ県の地方紙 *La Croix de la Corrèze* に、カステル・ノヴェルで若い女性奉公人を探しているという求人広告が載った。これに目をとめたジャン・ヴェリヌは、娘二人を奉公に出すことにした。ヴェリヌ一家は、ジュヴェネル一族の出身地オーバズィヌに近いクラルダン *Clarendent* という集落に住んでいた。子供たちは、木立の中に切り開かれた坂道を1.5キロほど歩いてダニア *Dampniat* の村の小学校に通った。一家には子供が7人いて、アンナは二番目、ポリーヌは四番目の娘だったが、暮らしは楽ではなかった。戦時中のこととて汽車も出ず、二人は18キロの道のりを歩いてカステル・ノヴェルまでやってきた。Miss Draper は姉のアンナを料理人、妹のポリーヌをベル・ガズーの子守として雇うことにした。当時ベル・ガズーは3歳でいたずら盛り、ポリーヌは13歳だった。二人の姉妹は城の北側の塔の上部に部屋を与えられた。夜になるとふくろうが鳴き、壁の隙間をねずみが駆け回る。冬は室内でも凍るほど寒かったと、後年ポリーヌは書いている。

1918年11月、連合軍はドイツと休戦協定を結び、終戦となった。アンリは新聞社の編集長に復帰した。カステル・ノヴェルでコレット2世は5歳になっていた。父や母の顔を見るのは月に一度、どうかすると半年も会えないこともあった。しかし両親揃っての秋の収穫やクリスマスは、最高に楽しい思い出として幼い心に刻まれた。城を囲む斜面でも日当たりの良い果樹園にコレットはあみずと柿の木を植えさせた。この地方では珍しく、ポリーヌはどんな実をつけるか楽しみだったと回想している。1919年、6歳になったコレット2世はヴァレットツの小学校に通い始める。『娘への手紙(1916-1953)』に、「学校では、一生懸命お勉強してほめられました」という娘からの手紙が登場するのはこの頃である。

1921年の年末をコレットはカステル・ノヴェルで過ごした。翌1922年1月4日にパリのシュセ通りのすまいに戻ったときには、娘の他にMiss Draper とポリーヌを伴っていた。コレット2世にとってカステル・ノヴェル

時代は終わりを告げ、モリエール高等中学校に通うことになった。送迎役はポリヌだったが、10月からは寄宿生としてサン＝ジェルマン＝アン＝レ高等中学校に入ることになり、Miss Draper はロンドンに帰っていった。ポリヌはその後コレットが亡くなるまでの32年間をその傍らで過ごすことになる。

カステル・ノヴェルはジュヴネル夫妻が1925年に離婚した後も、ジュヴネル一族が折にふれて集まる場所であり続けた。しかしコレットにとっては遠い場所になってしまった。コレットは1935年4月に、10年来のパートナーであるモーリス・グドケと三度目の結婚をしたが、同じ年の8月にコレット2世はパリ在住の医師カミーユ＝アドリアン・ドスとの結婚が決まり、父親の意向を入れて、カステル・ノヴェルで盛大な結婚式を挙げた。しかしこの結婚は3ヶ月で破局を迎えることになる。1935年はこれがすべてではなかった。娘の離婚を承諾した直後の10月5日、パリの路上でアンリが心臓発作で倒れ、急逝したのである。アンリの葬儀は、三番目の妻ジェルメーンが見守るなかカステル・ノヴェルで営まれた。アンリはヴァレツ村の教会脇の、父と祖父、そして弟のロベールが眠る墓地に埋葬された。教会広場 Place de l'Eglise に向かって、道の向こう側からアンリの胸像がプラタナス繁る広場を見下ろしている。これはアンリの死から三年後の1938年に建てられたもので、二メートル以上もある台座には、外交官として活躍したアンリのことばが刻まれている。この胸像が立つアンリ・ド・ジュヴネル広場 Place Henri de Jouvanel には、正面奥に司祭館、左手にエスパス・コレットがある。1999年竣工のエスパス・コレットは、最新の設備を備えたイヴェント・ホールである。パリのコレット広場、故郷サン＝ソヴールのコレット通りに加えて、ヴァレツのエスパス・コレットは、この地を愛したコレットの名を、アンリ・ド・ジュヴネル広場という背景の中で後世に伝えるものとして意義深い。

カステル・ノヴェルは二男ルノーが相続したが、第二次大戦中、城は親独義勇隊に接収されるという憂き目にあった。コレットの死から二年後の1956年、売りに出された城を購入したのは、現在の所有者であるアルベール・パルヴォ氏の父だった。城は改装されて4つ星の高級シャトー・ホテルに生まれ変わった。櫨の木のコレクターであるパルヴォ氏は、6ヘクタールの庭園に世界各地の櫨の木を植えている。

カステル・ノヴェルを訪れるために筆者がブリーヴ駅に降り立ったのは2007年8月12日の朝9時半過ぎだった。城まで徒歩10分で行ける、一駅先のヴァレットに停車するつぎの電車は18時15分だという。日曜日だったせいかもしれないが、ローカル線は廃線寸前のもものも多い。8キロほどの距離をタクシーはあっという間に走り抜けて、小高い丘の上に立つシャトー・ホテルの正面に連れていってくれた。部屋は昔ポーリーヌたちの部屋があった、塔に近い北側の小部屋だったが快適だった。一階サロンの壁に航空ショーの様子を描いたデッサンが貼ってあったが、コレットを想わせるものは見当たらない。城の歴史を知りたいと言うと、一枚のリーフレットを渡されたが、そこにやっとアンリとコレットの名を見ることができた。コレットゆかりの地を訪ねてこの城に来たと言うと、女性従業員が、一階の食堂は当時書斎でしたと教えてくれた。航空ショーに使われたであろう草地は宿泊客用のゴルフ場となり、テラスから望むヴェゼール川対岸には、ゆるやかな丘が連なって美しかった。

カステル・ノヴェルがホテルになったことは良かったのかもしれない。個人の邸宅になっていたら、外から眺めるだけで中に入ることは恐らく許されなかっただろうから。しかしコレットのことを知りながら、ここが作家とゆかりの深い城だということに気づかずに立ち去るとしたら、少々惜しい気もする、と思いながらこのシャトー・ホテルを後にしたのだった。

2008年8月に再びヴァレットを訪れた筆者は、カステル・ノヴェルの城南斜面に広がる草地の続きに、コレットの庭 *Jardins de Colette* という花の公園が新たに誕生したことを知った。2008年5月1日に開園したこの公園は、5ヘクタールの園内にコレットの生家の庭から始まって、終のすみかとなる、パリのパレ＝ロワイヤルの庭園に至る六つの庭を想定して、それぞれの庭でコレットが愛でた草木、花々を区画ごとに再現している。動物好きだったコレットに関連づけて子供たちも楽しめる“茂みの迷路”など、随所に工夫が施されている。製作中の部分も含め、コレットゆかりの植物たちがどのように生長していくのか楽しみである。

3. ダニアの村に眠るポーリーヌ

ブリーヴから電車で17分、オーバズィヌ駅に降り立ったのは、宿をカステル・ノヴェルからブリーヴの町に移した日の午後だった。ゆるやかな山の

斜面を2キロほど廻り歩いてダニア Dampniat の集落に到着。村はずれの小高い墓地に、ポリーヌは夫とともに眠っていた。墓の上に陶製の“本”が開かれている。左頁にはポリーヌの顔写真が、右頁にはコレットの筆跡で「愛しいポリーヌ、知っている国でも知らない国でも、あなたには私の行くところどこにでも一緒にきてほしいの。古くからの変わらない友情のあかしに」と記されている。コレットは新しく本を世に送り出すたびに、刷り上ったばかりの本をポリーヌに一冊献じることを常としていたが、このことばは、1949年に『知っている国で』*En pays connu* が上梓された時、ポリーヌに贈呈された本の扉に認められた献辞で、それを陶製のプレートにしたものであった。69歳になった1942年頃から持病が悪化し、ポリーヌの介助を受けて車椅子に頼らざるを得なくなっていたコレットを思うとき、このことばは重みを持ってくる。集落に一軒しかないレストランに立ち寄って、墓石に刻まれているポリーヌ・ティサンディエを知っているか訊ねたところ、奥から出てきた年配の女主人は知らないという。旧姓にしてポリーヌ・ヴェリヌとは聞くと、ヴェリヌの家の人たちなら知っている、私の家と行き来があったからとのこと。ポリーヌの親族は隣村のラ・コストに引っ越したけれど、墓参りにはやって来るという。試みに、かつてポリーヌが学んだ小学校と棟続きになっている村役場に立ち寄って、コレットとポリーヌについてなにか資料がないか聞いてみたが無駄だった。この村の宝は、すぐ脇に立つ教会にある中世のフレスコ画だった。

1925年にコレットがアンリと離婚したとき、ポリーヌはコレットのそばに留まった。やがてポリーヌはコレットにはなくてはならない人になっていった。使用人でありながら、ポリーヌはコレットの母親、保護者のような存在になってゆく。そんなわけで1945年夏、ポリーヌから結婚するつもりだと告げられたとき、コレットは仰天して、「わたしを置いて行ってしまうの？」と聞いたのだった。結婚相手は昔シュセの館で料理番をしていた女性レオンティーヌの弟で、オーヴェルニュ地方出身のリュシアン・ティサンディエだった。リュシアンはパリ中央市場の仲買人をしていて。こうしてこの年、花婿46歳、花嫁43歳のカップルが誕生した。カステル・ノヴェルにいたコレット2世は、知らせを聞いて結婚式に駆けつけた。結婚後はリュシアンがポリーヌの部屋に引っ越してきたため、コレットの生活に変化はなく、コレットはリュシアンを「わたしのお婿さん」と呼んだ。仕事柄リュシ

アンは食いしん坊のコレットの食卓を豊かにするために大いに貢献したことは言うまでもない。コレットが1954年に死去してから5年後の1959年、モーリスはリュシアン・ルロンの未亡人 Sanda Dancovici と再婚し、翌年長男ロランが誕生した。ポリーヌは1962年までモーリスに仕えた後引退し、夫婦でパリ北方のタヴェリに住んだ。リュシアンは1983年に84歳で、ポリーヌは1990年12月に88歳でこの世を去り、二人はダニアの村で、ポリーヌのすぐ上の兄 James の墓の向かい側で永遠の眠りについた。

4. キュールモントの村とコレット・ド・ジュヴェネル

ブリーヴから30キロほど南方にキュールモントという小さな村がある。城を戴いている、小高い丘の上の村である。この城をアンリの弟ロベールが購入したのは、アンリとコレットが結婚した、1912年のことだった。ロベールも優れたジャーナリストだったが、アンリとコレットが離婚する前年の1924年に42歳で他界し、城はアンリが相続した。1935年にアンリが亡くなると、二男ルノーの妻アルレットが持参金で購入した。その後この城は1940年にアルレットからコレット2世に譲渡された。ルノーの最初の妻アルレット・ルイ＝ドレフュスは、父アンリの三番目の妻ジェルメヌ・エマンが亡き前夫シャルル・ルイ＝ドレフュスとの間にもうけた娘だった。裕福だったがユダヤ系のため、戦時下においてユダヤ人が城の所有者であり続けることは困難になり、コレット2世に譲渡したのかもしれない。

パリが1940年6月14日に陥落する直前の、13日の未明、コレット夫妻はポリーヌを伴って、パリ西方36キロにあるメレの村に所有していた週末用の別荘を抜け出し、キュールモントに向かった。15日の夕方、三人はキュールモントにたどり着いた。

キュールモントに関しては、ロットマンによる伝記『コレット』が最も詳しく、つぎのように紹介されている。(『コレット』工藤庸子訳 pp.432-433)

ジュヴェネル家の土地は、高い石の塀にかこまれた二つのシャトーからなる。「サン＝ティレール」と「プラス」と名付けられたこのシャトーのほかに、昔の厩舎のうえに建てられた家があり、これは「僧院」と呼ばれていた。この家は住めなくはなかったが、まだかるうじて建っているシャトーの「プラス」はもうしばらくまえから住居としては機能しなくなっていた。(中略)

家屋は大広間と四つの寝室からなり、広大な菜園がついていた。今では二十七歳になり、相変わらず自分の生きるべき道を模索しているコレットの娘にとって、ここは樂園であったにちがいない。彼女は疎開してくる人たちをうけいれ、捨てられた動物たちの世話をし、家を建てなおし、修復する。(中略)

グドケは、ずっとのちに回想したときには、キュールモントの生活は悪くなかったと語っている。天候に恵まれ、庭は花盛りだった。村には戦争の物資不足にさほど影響をうけていないらしい洒落たレストランがあり、それを別にすれば、ほとんど離れ小島に住んでいるかのようだった。

2007年8月14日、筆者はブリーヴからキュールモントを目指した。ローカル線でブリーヴから25分、サン・ドニ・プレ・マルテル駅で下車し、タクシーに25分ほど揺られて丘の上のキュールモントに着いた。村の入り口は教会広場で、正面にある教会の扉は閉ざされていた。教会の後方で高い城壁がひととき人目を引いた。幸いにも現在の城の所有者カントグレイユ Cantegreil 夫妻のご好意によってこの城壁に囲まれた敷地内を見て廻ることができた。この城はカントグレイユ氏の両親が購入したとのこと。高い見張りの塔を頂く二つの城は、50メートルほどの間隔を置いて立ち、角塔のある城はサン＝ティレール、丸塔付きの城は、地元ではプラと呼ばれていた。カントグレイユ家の所有になって以来、城はだいぶ修復されたそうだが、今なお修復中で、中に入ることはできなかった。東側の、城壁の縁に沿って立つ平屋の下は、城壁の外側に入り口がある厩舎となっていた。この納屋を兼ねた使用人のための平屋が、改装されて夫妻の快適な住まいとなっていた。家の中を案内してくれたが、丘の上のこととて眼下に広がる山並みは素晴らしく、カステル・ノヴェルからの眺望が連想された。アンリの弟ロベールが最初にここを購入したのも、カステル・ノヴェル以上ともいえるこの見晴らしの良さにひかれたのかもしれない。コレットはこの城の上部を飛び交うつばめたちを『さかしま日記』の中で描写している。モーリスは『コレットのかたわらで』 *Près de Colette* (p.184) で、コレット2世は住み心地の良い、城壁沿いのこの家を二人の住まいに提供してくれたと記している。現在南側に広がる芝生は菜園だったのである。カントグレイユ夫妻はパリ在住で、ここでヴァカンスを過ごしていた。カステル・ノヴェルのホテルがコレットの

面影を表面上消し去っているのとは対照的に、数日前にコレットを偲ぶイベントを企画し、沢山のひとがつめかけたという。

夫妻の家を辞して村の中央道をさらに進むと左手奥にレストランを兼ねた小さな宿が一軒あった。別れ際タクシーの運転手が、「この村には評判のレストランが一軒あります、時間があったら試してごらん下さい」と言っていたが、そのレストランに違いない。グドケの言う「洒落たレストラン」が今に残ったものだろう。残念ながら約束しておいた、同じタクシーが迎えにくる時刻が迫っていた。

2008年8月に再びキュールモントを訪れた筆者は、城内でカントグレイユ夫人に再会した。夫人は城に関する地元の新聞記事の切り抜きを送ってくれ、年に一度の城の一般公開日をメールで知らせてくれるなど、よそ者の筆者を心にかけてくれていた。19世紀末には1000人以上の住民がいたというこの村は、現在人口が200余名で、シャトーもしくはメゾンと称される歴史的家屋が10軒ほどある。そのうちの1軒をベルギー人と日本人女性、もう1軒をジュラ地方出身のフランス人と日本人女性のカップルが所有している。後者のカップルは神戸在住という。カントグレイユ夫人のご好意は、二人の日本人女性と無関係ではないのかもしれない。

電力不足でラジオからの情報を得ることすらできないこの陸の孤島の生活は、コレットにとって心休まるにはほど遠いものだった。モーリスに誘われて散歩に出ても、67歳で脚の悪いコレットには、坂の多い村周辺の道は苦痛でしかなかった。二人は約一か月の滞在の後、危険をも顧みずリヨン経由でパリに発ち、9月11日の夜にパレ＝ロワイヤルのアパートマンに帰り着いた。

戦後の1944年、キュールモントに住むコレット2世と、カステル・ノヴェルの城主ルノーは、戦時中の活動が認められて、それぞれキュールモントの村長とブリーヴの助役になった。しかしコレット2世は1947年にパリに居を移した。キュールモントの城は1949年に売却され、北アフリカ出身のロシュピエール Rochepierre 家のものとなった。荒れるがままになっていた城に修復の手が入ったのは、1972年につぎの所有者となるカントグレイユ氏の両親がこの城を購入してからのことである。

5. 結びにかえて

コレーズ県におけるコレットの足跡は、作家がジュヴネル家の一員だったことに端を発している。この土地とのかかわりは、夫や子供たち抜きに語ることはできない。コレット自身の人生の出発はサン＝ソヴールであり、終わりはパレ＝ロワイヤルであった。しかしサン＝ソヴールとパレ＝ロワイヤルを、コレットが生きた証として後世に伝えることに力を尽くしたのは、それぞれ異なる母を持つ、アンリ・ド・ジュヴネルの子供たちである。コレットと娘コレット2世は、濃密な情愛を共有するような間柄ではなかった。コレットは娘のために作家活動を抑えることなど考えなかったし、私生活もグドケとポリヌに守られて、思うがままに生き抜いた。そんな母に娘は距離を置いて接していたが、母亡き後は、その業績を後世に伝えるための活動に骨身を惜しまなかった。伝記作家の伝えるところによれば、「グドケの二番目の妻が未亡人になったときは、パレ＝ロワイヤルのアパルトマンやコレットの原稿、手紙、書物などを相続することになったが、コレットの娘は彼女がそれを売却することに異議を申し立て、新聞に論陣を張って、世間の注目を浴びた。さらに彼女は、パリの通りに母の名が付けられるよう運動した。(中略) 1966年、ここにコレット広場が誕生した。」(ハーバート・ロットマン著、工藤庸子訳『コレット』p.542) コレット2世は子孫を残すことなく1981年に68歳で病没し、次兄ルノーが1982年、長兄ベルトランも1987年に世を去った。しかしベルトランの二人の子供アンヌとユージュ、そしてルノーの息子フルクラの献身的な努力が実り、娘コレットが守り抜いた作家の“遺産”を公開する場として、1995年にサン＝ソヴールにコレット記念館がオープンした。三階の一隅に、昨年娘コレット・ド・ジュヴネルの部屋が新たに誕生した。この部屋から見おろすことのできるコレット通りにある、ディジョン在住のMuesser家所有のコレットの生家は、現在売りに出されている。財政的な問題が克服され、記念館の付属施設として一般公開されることを願うばかりである。

参考文献

COLETTE, S.-G. (2003) : *Lettres à sa fille* (1916–1953), Gallimard, Paris

GALAN, A. (2003) : *Colette, Baronne en Corrèze, citoyenne au Palais Royal*,
Ed. Lucien Souny, Mayenne

GOUDEKET, M.(1955) : *Près de Colette*, Flammarion, Paris

PICHOIS, C. et BRUNET, A.(1999) : *Colette*, Ed. de Fallois, Paris

VÉRINE, P.(2006) : *Colette et Pauline sans témoin*, Ed. Vaillant, Nice

ハーバート・ロットマン著、工藤庸子訳 (1992) : 『コレット』 中央公論社

Association «Les Amis de Curemonte» (2007) : *Curemonte, Village du Midi
Corrézien*